

## 第38回文化講座

# 発掘調査速報 2010 その1

【日時】 7月24日 (土) 13:30~16:15

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

## 第 38 回文化講座「発掘調査速報 2010 その 1」

平成 22 年 7 月 24 日（土） 午後 1 時 30 分～4 時 15 分

あいさつ	沖縄県立埋蔵文化財センター所長 守内泰三
中城御殿跡	大堀 翔平 ..... 1
円覚寺跡	山本 正昭 ..... 8

\* \* \* \* \* \* \* 休憩 \* \* \* \* \* \* \*

松崎馬場跡	山本 正昭 ..... 11
首里城跡「御内原北地区」	仲座 久宣 ..... 13

\* \* \* \* \* \* \* 質疑応答 \* \* \* \* \* \* \*

## 中城御殿跡

専門員 大堀 啓平

### 1. 調査の概略

- ・場所：那覇市首里大中町1丁目1番地
- ・期間：2009（H21）年6月2日～2009（H21）年10月30日 72日間
- ・調査面積：約250m<sup>2</sup>
- ・時代：近世・近代

### 2. 中城御殿の略歴

中城御殿は琉球国王の世子が居住する屋敷として造営された邸宅である。中城御殿は第2尚氏第8代尚豊王代に、現在の首里高等学校敷地内に創建された。尚泰王代になるとたびたび移転し、1857（尚泰王18）年には当蔵町、さらに13年後の1870（明治3）年には現在の那覇市首里大中町1丁目1番地に移転している。

1879（明治12）年の琉球処分での首里城明け渡しによって尚泰王は中城御殿に移り住み、王世子の邸宅としての機能は終了することになる。尚泰は6年後に東京へ移住するが、その後も「尚侯爵家首里邸」として尚家に縁の人々が暮らしている。

戦後は県外引揚者のパラック、旧首里市役所・首里バス会社のバスターミナルを経て、1965（昭和40）年に沖縄県立博物館が建てられる。2007（平成19）年に県立博物館が移転し、2009年4月に旧県立博物館建物が取り壊され現在に至っている。

### 3. これまでの調査成果

平成4年から石牆復元に伴い、平成6年まで県立博物館によって復元該当箇所を3次にわたって発掘調査が行われている。この調査では中城御殿当時のピットなどが検出されているが、中城御殿建物に伴う遺構は検出されなかった。

さらに平成19年度からは県立博物館の移転に伴って発掘調査が行われている。平成19年度の調査では中城御殿以前と目される石列や石敷遺構が検出されている。翌20年度には石疊や側溝など中城御殿当時の遺構が広域に検出、さらに旧庭園の池跡が残されることが判明した。遺物にも中城御殿に相応しい多くの舶載陶磁器や稀少な金属製品、大量のビーズなどが側溝内を中心に出土している。

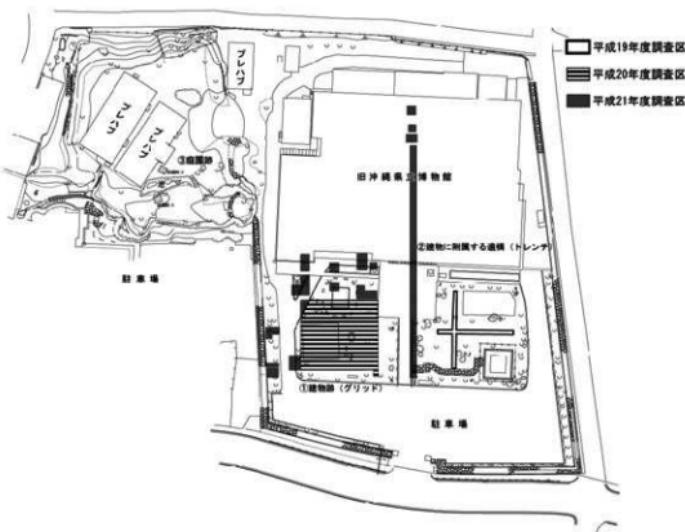


図1 平成19から21年度までの調査箇所

#### 4. 平成21年度の調査成果

##### 4・1 近代（II層）

20年度に検出された石疊や側溝の続きが検出された。また側道とみられる舗装面も検出され、中城御殿南西部の建物構成が想定可能な状態となりつつある。また旧県立博物館建物の下は遺構が破壊されていると予想されたが、一部には遺構が残されていることが確認された。

遺物には昨年と同様に中国産・本土産・ヨーロッパ産の陶磁器や石製品といった稀少な舶載品が数多く出土している。中でもヨーロッパ産陶器は底部の印章から20世紀初頭のイギリス Johnson Bros 社のもので近代を象徴する資料である。また石製容器は角小皿・碗・小杯が得られている。角小皿・碗は印刻、小杯は陽刻で草花文が装飾される。沖縄で得られない石材であるため、舶来品と目される。これらはいずれもこれまで報告事例のみられない注目される資料である。また金属製品やビーズも出土しているが、量・質ともに20年度ほどではなかった。これは20年度が御蔵付近であることに対し、21年度は酒蔵や中庭付近であることが反映されていると思われる。

##### 4・2 近世の遺構（IV層）



図2 中城御殿の地層模式図

中城御殿の遺構が検出されなかった場所に限って中城御殿の旧表土より下に掘り進めたところ、中城御殿の造成土層（III層）よりさらに下から近世の地表面や造成土、遺構が検出された。この近世の地表面は赤土を盛って整地されている。またTP1では円形石組遺構が検出されている。この遺構は内面のみに面を作られた石を組んで構築され、床面は填圧して硬化面が形成される。埋土中には魚骨が多量に含まれていた。

IV層中から出土した瓦は明朝系赤瓦が主体で、灰瓦は殆どみられなかった。また僅かに中国産やタイ産陶磁器が含まれるが、粗製品が多く造成土中に廃棄された日常雑器であるとみられる。

## 5.まとめ

- ①20年度に検出された石畳・側溝の続きが確認された。また側道とみられる舗装面が検出された。
- ②旧博物館の下にも一部に中城御殿の遺構が残ることが確認された。
- ③中城御殿の遺構よりさらに下から近世の遺構や造成土が検出された。

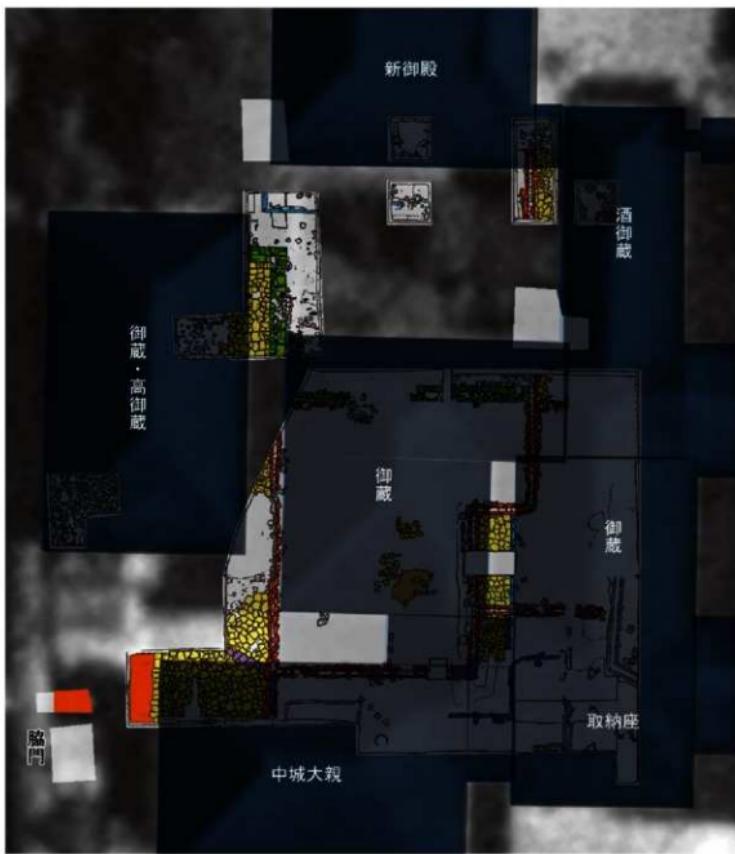


図3 検出構造と屋根伏せの位置相関図（背景写真：図1と同じ）



写真1 石疊検出作業



写真2 石疊・側溝検出状況（溝内と石疊直上には瓦礫が詰まっている）



写真3 石疊・舗装面（右側）検出状況



写真4 本土産磁器出土状況



写真5 堆積状況（下にみえる色の変化している土が近世の層）



写真6 円形石組遺構検出状況

# 円覚寺跡

主任 山本 正昭

## 1. これまでの発掘調査

琉球列島でも最大規模を有した寺院・円覚寺は1945年の沖縄戦によって姿を消した以降は、放生池や総門そして山門への石段周辺は琉球政府によって復元、整備されたが、仏殿や龍淵殿といった中枢施設は琉球大学の教員官舎やグラウンド、そして沖縄県立芸術大学のキャンパスの一部として近年まで利用されてきた。平成9年から史跡整備を目的として沖縄県教育委員会による遺構確認のための発掘調査が開始され、平成13年度までの5カ年間に及ぶ発掘調査でかつての円覚寺伽藍群の一端が明らかにされた。この時の調査では戦前まで残存していた建物群の基礎や石疊、更には庭園跡が確認され、将来において復元整備を行っていく上で重要な成果を得た。平成9~13年度にかけて実施した遺構確認調査が完了して以降も、円覚寺の東南北を画していく石牆周辺や山門周辺の発掘調査を小規模であるが沖縄県教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センターが行っている。この小規模な発掘調査では円覚寺の創建当初と見られる土地造成の遺構が確認され、約500年前において高度な土木技術の実態が明らかにされてきている。今回の報告は昨年度の調査で高度な土木技術の実態を示す遺構が検出されたため、その成果概要を披露するものである。

## 2. 検出された遺構

今回は山門の北西周辺、放生池を囲繞する石積みの背面までの約50m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。狭い調査面積であるものの、5基の石積み遺構と1基の石造り溝が検出された。石積み遺構はそれぞれ切り合い関係が見られたことから何度も改変が成されたことを窺い知れる。それぞれの遺構の特徴については以下に記す。

### 石積み1

昨年度の発掘調査において確認された野面積みの石積みで長さ8m、高さ3mに及ぶ土留めの石積みである。機能としては土圧を押さえるための石積みであることが想定され、出土遺物から15世紀末に構築されたことが窺える。

### 石積み2

石積み1の正面から約50cm間を置いて、相方積みの石積みが東西方向に長さ約1.8m検出された。遺物は出土していないため、明確な時期は判別できないが造成土直上に根石が据えられていることから石積み1とほとんど時期差が無いものと考えられる。なお、面石の控え部分には火を受けた痕跡を見る能够。

### 石積み3

石積み2の西端を切って南北方向に約1.8mの野面積みの石積みが確認されている。栗石を有した土留め石積みで、西側面は造成土で埋められている。造成土からは沖縄産陶器や中国産陶磁器が出土している。

### 石積み4

石積み4は南北方向から東西方向に向けて屈曲する野面積みの石積みで調査区の南西隅で確認されている。検出された長さは約2.4m、石積み2の面石控え部分から立

ち上げられていることから、石積み1、2よりも相対的に新しくなる。また石積み3から面石が連続することから一連の石積みであると想定される。南側は戦後復元の放生池石牆裏込め用の栗石内へ埋没している。

#### 石積み5

石積み3を起点にして東西方向に延びる野面積みの石積みであり、検出された長さは約1.5mで、一部火を受けた痕跡が見られる。栗石は見られず、ほぼ直線状に延びている。

#### 石積み6

石積み5を起点にして南北方向に延びる野面積みの石積み。検出された長さは約2.9mで栗石は見られない。高さは約30cm確認されているが、根石は更に下部に据えられているものと思われる。控え部分の造成土からは明朝系瓦が多数出土している。

#### 溝状遺構

石積み1から東西方向に延びる長さ約2.5mの石造り溝が昨年度に検出され、山門周辺の雨水を放生池側に排水していたものと考えられ、古絵図、古写真では窓えないことから暗渠として埋設されていた可能性が指摘される。今回、溝状遺構の西側を調査し放生池側まで延びる集石が敷設されているのが確認された。おそらく溝から流出した雨水を池側へ誘導するための排水施設であるものと想定される。

### 3. 各時期の遺構について

平成20年度の遺構確認調査では15世紀後半の遺物が石積み1前面の造成土から出土しており円覚寺創建年代まで遡る造成事業であることが判明した。土圧を押さえるために石積み1を設置し、造成土を大量に搬入したことが窺えたが、石積み2はこの造成土直上に根石を据えていることが確認されたため、円覚寺創建に伴う基礎事業の遺構であることが想定され、更に石積み2の面石側の集石は造成層の直上に据えられていることからこれも円覚寺創建時の造成である可能性が指摘される。この集石を裏込めとする石積み3は面側の造成土から明朝系瓦が多く出土していることから近世期に構築されたものと考えられる。文献資料では1652年に山門修復の記録が見られることから、修复工事に伴って基礎事業を改変がなされたものと考えられる。また石積み3は石積み4、5とそのまま接続していることからこれらの石積みも同時期に構築されたものと考えられる。石積み6は石積み5と接続していること、周辺から明朝系瓦が多量に出土していることから近世期に構築されたと想定できる。

まとめると山門北側においては2時期にわたる造成事業を見ることができ、最初は石積み1、2が構築された創建当初の1492年、そして2度目は石積み3～6が構築された近世期、すなわち山門が改修された1652年の時期に相当することができる。

溝状遺構に関しては周辺から遺物は特に出土しておらず、構築時期については不明である。

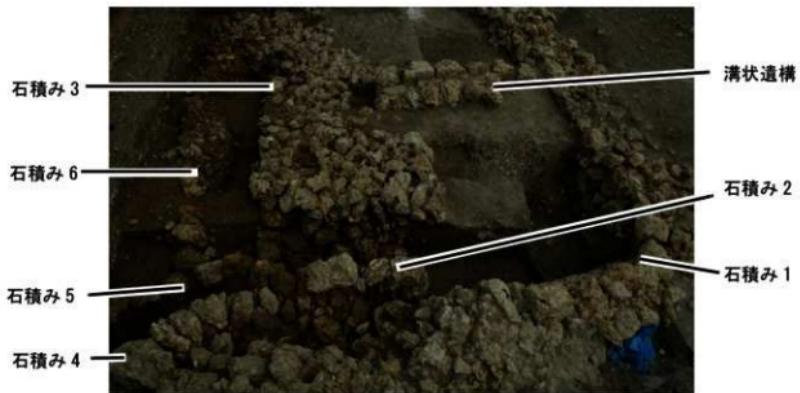
### 4.まとめ

今回の調査は円覚寺創建時になされた造成事業を窺うため、昨年度検出された石積み1の西端と放生池の石牆との繋ぎを把握するのを目的として発掘調査を行った。結果、放生池の石牆際から東へ約3mの範囲は複雑に石積みが切り合っている状況が見られ、また複雑な造成が行われていることが判明した。かつて池または湿地帯であった場所を平坦地に

するため土が流出しないための基礎事業を大がかりに行っていること、入念に造成を行っていることが今回の調査でも明らかになった。このような造成事業は沖縄県内において類例が全く見られないもので、琉球列島独自のものか、それとも周辺地域から伝播したものなのか、その技術系譜について今後、検証していく必要がある。



調査区全景（東から）



調査区全景（南から）

## 松崎馬場跡

主任 山本 正昭

### 歴史的由来

国学・孔子廟（現沖縄県立芸術大学）の北側に隣接し、龍潭を南に望む場所に位置している。かつて沖縄本島中北部の西海岸沿いを走っていた主要街道、西海道の一部でもあった。「松崎馬場」の名は龍潭に飛び出た縁に琉球松が植栽されたことに由来している。

首里古地図（1700年頃作成）では龍潭に接する縁沿いに松が植栽されているのが確認できる。更に『球陽』には1801年、首里三平等と泊村の士族によって松崎前の条路に嘉木を植え、白砂を敷いて整備を行ったとの記載が見られる。この整備は同年に国学・孔子廟が龍潭東側から円鑑池北側の場所に設置されたことに伴って実施されたものであると考えられる。

普段は街道として使用されていたが、冊封使が来琉した際には使節を歓待するため、爬龍船競漕を観覧できる臨時の棧敷席が松崎馬場に設置された。この観覧席は大小2つ設置され、御迎御屋と舟屋と呼ばれる附属屋が1866年の冊封使歓待の際の設営を示した『冠船之時御座構図』には描かれている。1886年に沖縄県師範学校の設置により敷地が縮小され、また敷地拡張のため閉じられてしまい、街道としての役割を終えることになった。さらに戦後は琉球大学や沖縄県立芸術大学の設置により西側一帯に校舎が建設され、旧状が大きく改変している。

### 調査の経過

首里城周辺の公園整備に向けて、松崎馬場跡における遺構の現状を確認するために試掘調査を11月4日～28日までの約1ヶ月実施した。試掘調査では松崎馬場の整地状況並びに西海道の遺構の一部が検出できるよう、かつての松崎馬場を横断する形で東西方向に1本、南北方向に3本、さらに後世の擾乱を受けて地表面から一部露頭している範囲の遺構検出を行った。また周辺の地形測量も同時平行で実施した。なお、調査終了後の現場は埋め戻しを行った。

### 調査の成果

主な成果としては龍潭側（南側）に道路跡、そして国学・孔子廟跡側（北側）から松崎馬場の整地層が検出された。

整地層は3枚確認された。最も新しい整地層はサンゴ礫を薄く敷いた近代で、その直下に1801年に松崎馬場を整備した際の整地層が検出された。更にその下層からサンゴ礫が厚く堆積した床面が検出され出土遺物から近世前半まで遡るものと思われる。更に、松崎馬場跡一帯が土地利用され始めた時期は15世紀代であることが最下層からの出土遺物で確認された。

道路跡は路面となる範囲は石灰岩を碎いて粉状にした微砂層で埋められており、かなり堅く固まる。また丁寧に加工された縁石も検出され、さらにその外側には同方向に走る石積みが検出されている。この微砂層直下の造成層から中国産陶磁器と銭貨が出土していることから、15世紀頃まで遡るものと思われる。また、当該道路跡は近世において松崎馬場内を通っていた中頭方西海道の一部である可能性も指摘される。

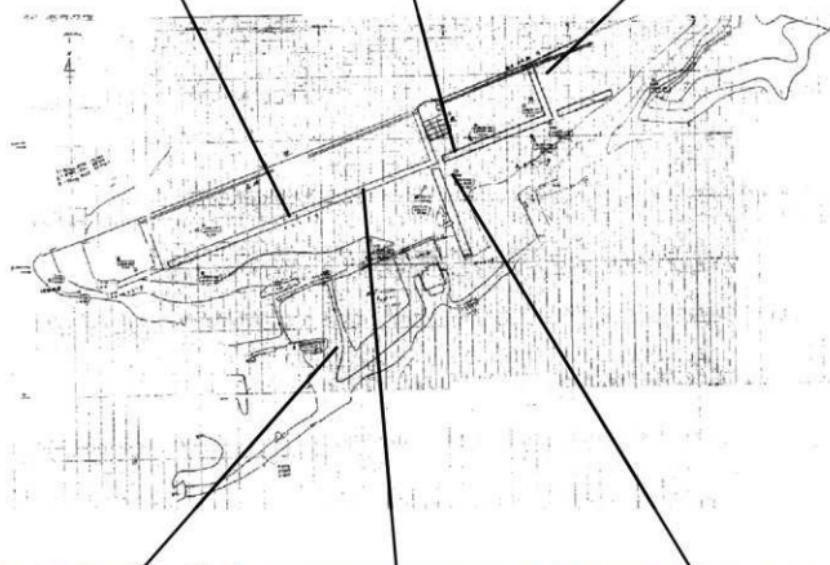
①



②



③



④



⑤



⑥

## 首里城跡「御内原北地区」

主任専門員 仲座 久宜

事業名：首里城跡「御内原北地区」発掘調査

所在地：那覇市首里当蔵町3丁目1番

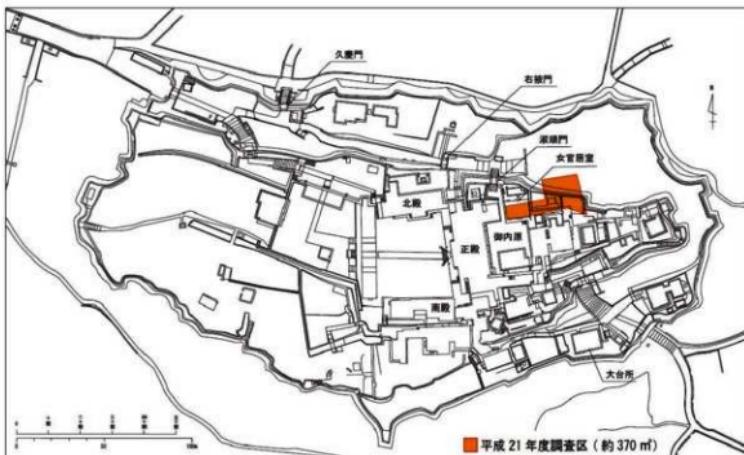
時代：グスク時代～近代

調査期間：2009（H21）年9月14日～2010（H21）年3月26日

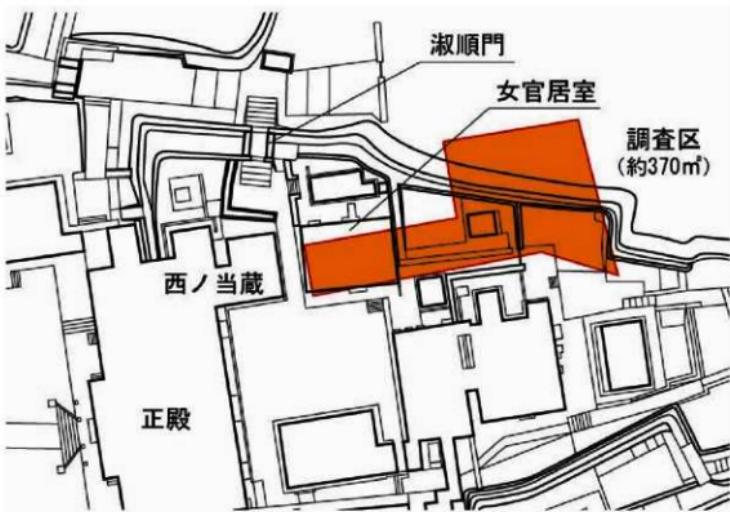
調査内容：首里城跡復元整備に伴う遺構確認調査を約370m<sup>2</sup>実施

### 1.はじめに

平成19（2007）年度の首里城跡発掘調査は、正殿裏手の内郭北側付近において約370m<sup>2</sup>の範囲で実施した。ここでは調査区の歴史的変遷に加え、現時点で判明している主な調査成果について報告する。



第1図 平成21年度調査区



第2図 沖縄県首里旧城図（横内家資料 明治初期）と調査区との重ね図

## 2. 調査区の歴史的変遷

現存する各種絵図・平面図によると調査区一帯には、かつて女官居室の西側一角及び、その東側に通ずる通路等が敷設されていた。これらの創建時期は不明であるが、正殿が数回にわたって失火し再建されることから、その際に近接する建造物も延焼した可能性がある。女官居室が存在した場所には、大正13（1924）年に沖縄神社の社務所が建てられるため、女官居室はその前に撤去され、周辺も神社の参道等敷設により改変される。その後、一帯は沖縄戦により破壊され、戦後は琉球大学の設置により、調査区周辺には大学本館や風樹館が建設される。

## 3. 調査の成果（遺構と遺物）

今回の調査区は、戦前・戦後の度重なる改変の経緯から、当初は遺構の残りを期待していなかったが、結果的に第7期まで区分できる数種の遺構が検出された。時期区分ごとの概要は次のとおりである。

**第1期**: 東西方向へ延びる石積みが1基確認されている。平成19年度調査検出の石積みにつながる可能性から、時期は14世紀後半～15世紀前半としている。位置的に現在の内郭石積み以前の城郭である可能性がある。

**第2期**: 14世紀後半～15世紀前半の石積みで、その規模から内郭石積みの内面にあたると思われる。東西の2ヶ所に検出し、東側では巨石を用いた根石が確認されている。西側では第1期石積みの前面に近接して積まれ、その間を赤色土で造成している。積み方は粗く、埋めることを前提に積まれた可能性がある。遺物は得られていないが、平成19年

度調査の実績から冒頭に記した時期とした。

**第3期:**14世紀後半～15世紀前半の遺物を包含する遺構で、基壇を有する礎石建物跡を指す。表面は全面が被熱しており、平成19年度調査の実績から、記録上1459年に起きた火災の痕跡である可能性が高い。

**第4期:**第3期火災後に築造された石積み、石列で、15世紀後半をあてている。第3期の基壇が破壊された箇所に縦横に積まれているが、1～2段が残るのみで性格は判然としない。遺物は中国産青磁、褐釉陶器等である。

**第5期:**第5期の遺構を埋めるように投入した造成土、コーラルによる舗装面、石積み、石組み遺構を指す。遺物は造成土中から15世紀後半～16世紀前半の中国産陶磁器が多量に出土している。このことから、16世紀中葉に大規模な造成工事が行なわれたことが判る。

**第6期:**第5期の石組み遺構内下部に堆積した遺物包含層。この包含層は、内郭(御内原)内の廃棄物を投棄あるいはこれらが流れ込んだものと考えられ、堆積土は建物が広がる南西方面の角から北東方向にかけて傾斜している。この中には多量の自然遺物のほか、16世紀後半～17世紀初頭に属する中国、備前、唐津産陶磁器のほか、刀子や鉢貨、箔絵の見られる漆の塗膜片が出土している。

**第7期:**第6期堆積土上に投入された造成土。石組み遺構はこの造成土により埋められ、廃絶したと思われる。遺物は初期段階の沖縄産陶器が多量に出土する中、中国産陶磁器や銭貨等が含まれ、その時期は17世紀前半を指す。このことから、石組み遺構は16世紀中葉頃に築造され、17世紀前半に廃絶した可能性がある。

#### 4.まとめ

今回の発掘では7期に区分できる遺構が検出され、内郭北側における遺構の変遷を見ることができた。その中で、第1期の石積みは、平成19年度調査時に検出した石積みとつながる可能性があり、現在の内郭石積みの内側に位置する点からも、旧来の城郭であった可能性が考えられる。

また、その後も度重なる火災や整備により造成が行なわれ（第3・4期）、続く第5期に位置づけている16世紀中葉の造成においては、広範にわたり工事が行なわれたと見られる。なお、この時期には尚真王により北側外郭を拡張したとされることから、内郭の整備もその一環として行なわれたことが考えられる。そして17世紀前半には次なる造成が行なわれるが、遺構が残されていないため、その状況は判然としない。

今後は出土遺物を詳細に分析し、調査報告書刊行に向け資料整理作業を進めていく予定にしている。



図版1 遠景1（東から）写真右側が調査区



図版2 調査区全景



図版3 第1期：石積み（北から）



図版4 第2期：石積み西側（南から）



図版5 第2期：石積み東側（南から）



図版6 第3期：基壇・礎石建物跡



図版7 第4期石積み・石列



図版8 第5期：造成層舗装面（東から）



図版9 第5期：石積み（東から）



図版10 第5期：石組み遺構（北東から）



図版 11 第 1・2・5～7 期：石組み遺構・石積み周辺



図版 12 第 5 期石組み遺構内堆積状況（黒色層以下：第 6 期、黒色層以上第 7 期）

## 平成 22 年度発掘調査等予定一覧

遺跡名・調査名	調査目的・原因	調査予定期間
県内遺跡詳細分布調査	県内各地域の埋蔵文化財分布調査と基礎資料作り	6月～7月
喜田盛遺跡発掘調査	県道改良工事に伴う発掘調査	7月
国指定史跡円覚寺跡発掘調査	史跡整備に伴う遺構確認調査	7月～8月
白保竿根田原洞穴総合発掘調査	新石垣空港建設に伴う発掘調査	8月～10月
基地内文化財分布調査	基地内に所在する遺跡の把握	10月～2月
首里城公園(中城御殿跡)発掘調査	県営首里城公園整備に伴う発掘調査	8月～12月
首里城跡発掘調査	国営首里城公園整備に伴う発掘調査	9月～1月
海軍病院建設予定地内発掘調査	米軍施設建設工事に伴う発掘調査	8月～3月
宮国元島上方古墓群発掘調査	県道改修工事に伴う発掘調査	9月
戦争遺跡詳細分布調査	重要な戦争遺跡の詳細な遺構確認調査	随時

# 沖縄県立埋蔵文化財センター行事案内

◎ 88月7日(土)

体験学習 「先史人の技～アクセサリー作り～」

【時間】 午前の部 00～12：00 午後の部 13：00～16：00

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 屋内外

◎ 88月14日(土)

第39回文化講座 「発掘調査速報 2010 その2」

講師：片桐 千亜紀・知念 隆博・中山 晋・西銘 章

【時間】 13：30～16：15

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

【内容】 平成21年度に当センターが実施した発掘調査成果について、各事業担当者が報告します。

- ・「大保川上流域の生産遺跡」
- ・「普天間古集落ほか」
- ・「宮国元島上方古墓群」
- ・「基地内文化財分布調査」

◎ 99月14日～99月19日(日)

移動展 「発掘調査速報展 2010 宮古島・今帰仁村歴史文化センター

【時間】 8：30～17：00 (入館は16：30まで)

【場所】 今帰仁村歴史文化センター 談話室

【内容】 センター設立10周年を記念して、北部地域にて移動展を開催します。

◎ 9月4日(土)

第40回文化講座 「発掘された歴史～発掘されたやんばるの生業」

なりわい

講師：片桐 千亜紀(当センター)・安座間 充(金武町教育委員会)

崎原 恒寿(恩納村教育委員会)・幸喜 淳(海洋博公園管理財団)

【時間】 13：30～16：30

【場所】 今帰仁村歴史文化センター 講堂

【内容】 北部地域(大宜味村・恩納村・金武町・本部町)の最近の発掘について紹介し、ひと昔前のやんばるの生業について迫ります。

\*行事予定は変更する場合がありますので、開催前にHP等で詳細情報をご確認ください。

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7

T E L : 098-853-8752 F A X : 098-835-8754

H P : h t t p : //www. maizou - okinawa . g r . j p /